オクラサマ

――一緒に外で遊ぼうよ。
――でも、外へは出られないの。
――じゃぁ、半分こしよ。

「スゲー…」
ぽかんと口を開けたまま奥村燐が呟く。祓魔塾の面々も門を潜った途端に言葉を失った。
呆気にとられて見回す周囲には、さまざまな低木があちこちに植えられた広い庭。きっと何とか式とか言うのだろう。その庭の奥は高い木々が森のように生い茂ってぐるりと取り囲む。飛び石の続く先には、古めかしい造りで、一体何部屋あるのかも判らないほどの、大きな日本家屋。そして、庭の奥にひっそりと、それでも威容を誇るどっしりとした蔵があった。東京都内の中心部とは思えない広大な敷地を持つ家だった。
「ホンマ、居るとこには居てはるんですなぁ…」
志摩廉造が感心したような、呆れたような口調で漏らす。
「んじゃぁ、ちゅうもーく」
霧隠シュラが注意を促した。奥村燐以下、祓魔塾の面々の前には、今回の祓魔隊隊長である霧隠シュラ、補佐として奥村雪男が立っていた。少し離れた場所に、この屋敷の主人夫婦と思われる二人が居る。威圧的な姿の壮年男性が腕組みをして正十字騎士團の祓魔師(エクソシスト)とその候補生(エクスワイア)たちを胡散臭そうに睨みつけていた。そしてそれよりはかなり若い、気の弱そうな女性が心配そうな面持ちで立っている。
「雪男、説明したってちょー」
祓魔師のコートにいつもの道具を一杯入れたベルトを締めた奥村雪男が、書類を手に一歩進み出た。頭をぼりぼりと掻きながら、ふあ、と大きな欠伸を漏らすシュラに、雪男はじろりと一瞥をくれる。
「こちらのお宅のお嬢さんが幽霊(ゴースト)によって蔵の中に囚われているとの訴えがありました。今日皆さんには、ここ、高原家の蔵における祓魔任務の補佐をして貰います。ちなみにあちらに居られるのが、こちらのご当主と奥様です。特に奥村君、くれぐれも失礼のないように」
俺かよ!といきり立つ燐を無視して、ぺらりと雪男が書類を捲る。
正十字騎士團へ寄せられた訴えでは、蔵の中に娘が入ったきり三日出て来ないと言う。蔵の中を探しても娘の姿は見えず、中で呼びかけても何の応えもなく、時折子供の笑い声とあちこちを走り回る足音が聞こえるだけとのこと。ところが、蔵の外から呼びかけると娘が返事を返すのだと言う。出て来いと宥めてもすかしても、否、の一点張りだそうだ。
「さて、まずは蔵の荷物を全て庭に出します」
力仕事、と聞いてうんざりとした雰囲気が流れる。一人燐だけが

張り切っていた。その後ろでぼそりと廉造が「力仕事ばっかりや…」と呟く。
「祓魔の任務は大半がこう言う仕事ですよ」
雪男がにっこりと微笑みながら嗜める。「ホクロメガネの言う通りだぜー、志摩」とエラそうに言う燐に「奥村君は物を壊さないように十分に注意してください」と釘を刺すのを忘れない。
「その後蔵における現象の確認、及び娘さんの捜索を行います。どちらかでも確認できたら、祓魔(エクソシスム)に入ります」
何か質問は?と言うのに、神木出雲と勝呂竜士が手を上げる。
「ええと、じゃぁ順番に。神木さん、勝呂君で」
「娘さんはお幾つですか?」
「五つだそうです。名前は昭子(あきこ)ちゃん」
「その幽霊(ゴースト)はどんな見た目したはるんですか?」
「残念ながら、これ、と言う姿はないようです。時に小さな女の子であったり、ぼさぼさの髪の毛に鋭い爪を持った小鬼のようであったり…と聞かされています」
塾生たちが顔を見合わせる。
「こんな子供たちに、しかも隊長が女だと?」
高原家の主人が吐き捨てるように呟く。勿論、わざと聞こえるように言っているのだ。
「お褒め頂いて恐れ入りますぅ♪」
シュラがにこやかに、うふ、とウインクをしてみせた。
「まぁ、性別を別にしても、この人はかなり優秀な祓魔師(エクソシスト)ですから」
雪男が更にフォローする。が、どちらも効果を挙げることは出来なかった。
「フン、祓魔師(エクソシスト)?悪魔だと?映画じゃあるまいし、馬鹿馬鹿しい。まやかしで金をせびるペテン師どもめ…!」
男が吐き捨てて踵を返す。あなた…、と形ばかり諌めた細君が、燐たちの方へ詫びるように一礼して後を追った。母屋に向かう男性が、一日で解決できなければ叩き出せ!いや、○○建設に電話しろ!と苛立たしげに怒鳴るのが聞こえてきた。
「なんだ、あれ…」
驚いた顔で燐が呟く。
「ああ言う反応の方が当たり前よ」
出雲が呆れたような、少し怒ったような口調で答える。
「でもよー、仮にも自分の娘が悪魔に捕まってるんだぞ?あんな態度ってあるかよ?」
「知らないわよ!ここの家はそうだってコトでしょ!」
燐はまだ納得しかねるようだったが、出雲が早々に会話を打ち切ってしまったので、黙るしかなかった。
「誰もが悪魔が視えるわけじゃないし、祓魔(エクソシスム)に理解があるわけじゃないからな。ま、気にすんな」
シュラがぽんと出雲の肩を叩きながら、燐に向かってひらひらと手を振った。
「うーん、あの奥さん、儚げでエエわ〜」
廉造がぼそりと呟いたのに、勝呂がぽかりと拳骨をくれる。それ

を横目に雪男が場を変えるように二つ手を打った。
「じゃ、皆さん作業に掛かりましょう」

「うあー、アチィ…」
燐がひじまで捲くった袖で、汗を拭く。顔は埃と汗まみれになっていたようで、シャツに汚れの筋がついた。
「それにしても、随分早く終わったね」
「兄さんのバカ力が有効に発揮できて良かったね」
杜山しえみの言葉に雪男がメガネを直しながら言う。バカ力言うな！といきり立つ燐を、シュラが拳固を見舞って黙らせる。
「イヤ、ホンマ。奥村君の体力があって大助かりやで」
げんなりした廉造の言葉に、燐が照れたようにへへ、と直ぐに機嫌を直して笑った。
かなりの重量物があったが、想像に反して蔵にはほとんど荷物がなかった。それで大した時間も掛からず蔵を空にする作業は終わってしまったのだ。今は庭先に用意された莫蓙の上で、休憩を取っている。使用人と思しき若い女性と、先ほどの気の弱そうな細君が茶と大福を運んできた。
「どなたか幽霊（ゴースト）見はりました？」
子猫丸の問いに、祓魔塾の面々が首を振る。
「捕まっているって娘さんも見掛けなかった」
しえみが心配そうに呟いた。
「アンタたちが祓魔師（ふつまし）さんかね」
背後から声が掛かる。振り向いてみれば、着物を着た小さな老婆がいつの間にか莫蓙の上にちょこんと座っていた。「お母さん」と細君が呼んだので、高原夫妻の母君、今捕まっている娘の祖母だろう。
「俺たちはフツマシサンとかじゃねーよ。蔵に捕まったって女の子を助けに来たんだ！」
「バカね！『祓魔師（ふつまし）』は祓魔師（エクソシスト）のことよ！」
出雲が小声だが鋭い調子で叱責する。あれ？と燐が慌てて周りを見回すと他の面々が呆れたような、恥ずかしそうな顔をしている。かっはっは、と老婆が大きな声で笑った。
「そうかい、随分若い祓魔師（ふつまし）さんたちだの。私が高原サト。今回孫を探してくれと頼んだ婆（ばば）ですじゃ。どうぞ孫を見つけてやってくだされ」
小さな老婆が更に丸くなるようにお辞儀をする。途端に皆が慌てて姿勢を正していっせいにお辞儀を返した。
「なぁ、婆ちゃん。なんで祓魔師（エクソシスト）を呼んだんだ？蔵には孫なんて居なかったぜ？」
早速足を崩して雪男に小突かれながら、燐が老婆に尋ねる。
「孫はな、『オクラサマ』につかまっとる」
「オクラサマ？」
一同がきょとんとする。
「ちょっと。お母さん、やめて」
「雅代、お前も覚えとろう」
老母がぴしり、と細君を黙らせた。